

は全部やられて丸焼だった。軍港が空襲された時、港には軍艦など入っていたので擬装していた艦艇も大部分やられたらしい。

海兵団は軍港の側にあつたので、爆弾や焼夷弾を受け、数は当時つかめなかつたが、犠牲者は相当あつたと思います。われわれ自動車班は逃げまどう住民をトラックで運んで、山向こうの神山峠を越え、熊野へ避難させた。そこまで三、四十分ぐらいかかるから、そのため軍港の方の様子は余り良く判らなかつた。私たちは軍港や海兵団を守るといふより、住民を守つたわけです。

広島原爆の時はわれわれは自動車を分散して神山峠の山の中で生活していた。山から原爆の入道雲は見たが他のことは判りません。呉―広島間は、当時汽車で四十分ぐらいかかる距離ですから、海兵団の中には救助に行つた隊もあつたようです。私は放射能の被害は、今何でも無いから大丈夫だったのでしよう。その後引き続き続いての福山は空襲でほとんど全滅したみたいだった。

自動車班の長は上等兵曹で、十八人ぐらいの編成だった。山中での生活は大部粗末になつていたが、コンバンガラとは違つて何とか空腹はしのげ、これも運が良かったわけです。

九月一日予備役編入、一等機関兵曹に任ずとありますので、その日に復員となつたわけですよ。

留守宅では父が元気でポチポチ農業をやつていたし、慶応生まれの祖母も元氣、弟は兵隊に取られる年でないので一応皆元氣でいて、これも運が良かったといえましょう。ただ、胸の傷は今でも腕の上げ下げに不自由している。

## 南大東島 第三百二十三設営隊

福岡県 岸川 甚一

―岸川さんは経歴を見ますと陸軍から海軍へと転籍編入されたということですが、入隊の経緯を聞かせて下さい。

私は大正三年四月二十一日生れ、昭和九年徴集で甲種合格だったのですが、いわゆるクジのがれというか、五尺二寸で寸足らずというか、九年十二月一日に第二補充兵となりました。陸軍に臨時召集されたのは十九年六月でしたが、相の浦海兵団に入団させられ、陸軍から海軍に籍が移されたわけです。

私は乙種の建築工業校出のため、工作兵として佐世保鎮守府施設部へ派遣され、そこで教育を四十日ぐらい受けました。工作上の技術教育中は年配者が多く、ほとんどが建築、土木、大工、漁師等、施設関係の職種の人たちでしたが、本職業は別として団体的共同訓練では相当絞られました。

私たちは、派遣のまま第三百二十三設営隊付を命ぜられ、全部の職種のをそろえ、沖繩飛行場補修要員となった。しかし、そのころは負け戦の最中で、先まで行けず大牟田から「萩川丸」に設営機材を積み込みましたが、「兵器を渡す」というので取りに行ったら、六連発の鴨射ち猟銃を六人に一挺ぐらい渡されました。

翌日出発したが、空襲がはげしいので奄美大島に機材を降ろし、小さな機帆船に積み替え南大東島へ出発しました。船が小さいので大揺れで皆船酔いでしたが、私は酔わないので伝令となり船の中を走り廻りました。

八月二十九日着、製糖会社のクレインで、人も機材共々吊り上げて上陸しました。南大東島は当時、日本製糖会社の私有地で、島内は砂糖黍畑、周囲は岩礁地帯、中が凹んでいてその真中に大きな池（幾分塩気あり）があった。

そこに仮兵舎を作り、第三百二十三設営部隊約二百十―二百六十人が入った。今川部隊といって隊長は少佐か中佐でしたが、我々は兵器は一切使ったことはなかった。

設営隊の仕事は、飛行場滑走路の修理でしたが、しよつ中爆撃され、二十メートルぐらいの穴があき、土地が海面すれすれのため直ぐ水が濁ってしまふ。地面は珊瑚礁なので、土を運んで埋めるが、作業中にまた爆撃を受ける。

沖繩の往き帰りに、行きがけの駄賃と残飯整理のためか爆弾を落して行く。爆弾は二十五キロ〜五十キロぐらいなので穴は相当深かった。施設もやられた。とに角、東西南北四×七キロぐらいの小さな島だったが、一番高い丘の上に大神宮というお宮があり、年に一度秋祭があったらしい。

島は先に申したとおり、全島砂糖黍畑といつてもいい。島の中にはトロッコの線路が敷いてあった。島の砂糖と内地の米等とバターで、食料は内地にたよっていた。島民は老人だけであつたようで、若者は疎開していなかった。軍は陸軍が主力であつたようで、通信所などもあつた。

―戦争が後期になると補給が充分でなかつたでしょう。砂糖黍だけ噛つてもいられたかつたでしょう。し、空襲や艦砲射撃は。

私は甘党でしたので噛っていたため、歯を悪くしました。十一月一日ごろ、潜水艦で食糧を運んで来たけれど、天候が悪く陸揚げが出来ず引き返し、その後空襲が激しいため食糧の補給が無くなった。

十一月十日ごろだつたか、私は半袖半パンツで洗濯をし倉庫に乾していたら、飛行機が低空で来たので、日本のだと思つて手を振つたら銃撃された。倉庫の中にも弾痕が沢山あつたが、防風林ごしで敵味方がはっきりしないで大失敗でした。

そんな具合で南大東島は完全に孤立し、まず困つたのは食糧でした。主食は唐芋、葉は汁の中に入れ、お茶は笹の葉を石油缶で焚いて飲む、バッタを火であぶつて食うが、蛇は一匹もいなかった。ピンロー樹は竹の子の代用、一番有難かつたのは岸壁のくぼみに溜つた海水が夕方には塩となり、砂糖とともに貴重な調味料となつたことです。

この辺は台風銀座といわれる所で、年に二、三度、植物は汐風で葉が全滅するが、一週間もすれば新しい葉が出るし、甘蔗も大きくなる。自然はうまく生物を生かしているとその時つくづく感じました。

―フィリピンや台湾沖の海戦も終つたころの情報は知っていましたか。

ある程度通信所で受けていたろうが、私は機材倉庫

長で物品の貸出しなどでしたので、余り良くわからなかった。沖繩戦の時は空襲は激しかった。爆撃で飛行場滑走路に穴があくのだが、トラックも車もない。歩いて行っても作業が出来ない。艦船も全然立ち寄れない、クレーンは爆撃されているので荷揚げは出来ない。また十一月過ぎれば波が荒くて船は寄り付けない。心理的にも不安で、いろいろなデマが飛ぶ。米軍が上陸するとか。

空襲の時、陸軍にも高射砲はあったらしいが、機関銃を射つたようで、敵機を撃墜した。すると敵が同僚を助けにきた。日本は玉砕だ玉砕だというが、米軍は人命を大切にしていた。

一番恐ろしかったのは、滑走路の補修でトラックに乗って行って艦砲射撃をされたときです。飛行機の爆弾は見ておれば大体見当がつくが、艦砲は島が小さいから右から射っているのか、左からなのか判らない。弾は音がドオン・ヒューと気味悪い余韻を残して落ちてくる。得体の知れぬ怪物みたいで、爆風で私も右の耳が聞こえなくなつた。

このような孤立無縁の島の戦いで命があつて帰れたのは、入り口は一坪ぐらいでも、下へ降りると二百、三百人ぐらいも収容出来る鍾乳洞のような洞窟が所々にあつたためです。しかし、そこに寝泊まりしているので湿気が身にこたえて、神経痛やリューマチ性の症状が多く出ました。

終戦の時、米軍が来て、兵器を点検するという情報があつたので、秘密の物は岸壁から海へ投げ捨てたが、とうとう米軍は来ませんでした。終戦になつてから残念だつたことは、製材中の不注意のため戦友二人が事故で死亡したことです。十一月に、帰ると家に手紙を出した人だったので、周囲の戦友は家族にどう言つていいかと随分困つていた。

私たちの設営隊は技術者の集団だったので、人間関係は良かった。試験があつて階級が上がつても、同年兵は使えず一緒に仕事をした。だから階級の上下はなしで、炊事当番も一緒にやった。だから、その事故死にしても心を痛めていたわけです。

引き揚げは海防艦が来たが、甘蔗だけ食べているの

で体力が無くなり船酔いしたこともない私をはじめ皆船酔いした。船は鹿兒島に着いたのだが埠頭には着かず浜の石垣に筏で着いた。石垣に登るのだが体が弱くて荷物を捨ててやつと登った。

汽車は満員でなかなか乗れず、窓から乗って夜中佐賀駅に着いた。

家に帰ったら皆びっくりした。佐世保海兵団へ問い合わせたら「島へ行ったから全滅だ」といわれたという。自分も早目に出発して沖繩へ行っていたら命はなかったらう、それが運命の別れだったと今も思っています。